

## 発掘調査の概要

### 石神遺跡東方の調査（飛鳥藤原第212次）

石神遺跡は飛鳥寺の北西に位置し、明治35年・36年（1902・1903）に須弥山石・石人像が発見されたことで著名です。奈良文化財研究所は、昭和56年（1981）から石神遺跡を継続的に発掘調査してきました。その結果、水落遺跡の北の南北約180mの範囲の中に、7世紀を中心とする時期の建物、広場、井戸、石組溝等の施設が計画的に配置されていたことがあきらかとなりました。遺跡は大きく3時期に分かれ、時期ごとに大規模な造成工事や建物の建て替えがおこなわれたこともわかっています。

石神遺跡の内容や性格をさらにあきらかにするため、奈良文化財研究所では昨年度から遺跡の東方の発掘調査に着手しました。昨年度の調査では、石神遺跡第1次調査区の東隣りの水田に東西に細長い調査区を設定し、東西方向に50mほど延びる飛鳥淨御原宮期の掘立柱塀と溝を検出しました。この塀と溝は西から続いており、遺跡の南端に長大な区画施設が



調査前状況（南東から、この水田の左奥が昨年度調査区、さらに奥の水田が石神遺跡第1～4次調査区）



雪に包まれる石神遺跡（南西から）

あったことがわかりました。

今年度は、昨年度と同じ水田の東端に、南北24m、東西14mの調査区を設定しました。そのすぐ南東は、飛鳥寺北面大垣の北門があったと考えられている場所にあたります。昨年度に検出された掘立柱塀と東西溝が東にどこまで続くかを探りつつ、飛鳥寺との関係をも視野に入れて土地利用の実態をあきらかにすることが、今回の調査のねらいです。

発掘調査は2022年12月から開始し、この原稿を執筆している2023年1月現在も調査を継続しています。10年に一度の寒波に見舞われながら遺構検出を進めていますが、調査区内には、昨年度の調査で検出された東西溝に接続するとみられる南北溝が存在することがあきらかとなりつつあります。また、昨年度の調査区と同様に、弥生時代の土坑や古墳時代の堅穴建物等、この地の継続的な土地利用を示す遺構も確認されています。

詳しい調査成果は次号での報告を予定していますので、皆様どうぞご期待ください。

（都城発掘調査部 谷澤 亜里）



調査風景（南東から）



調査区南端での南北溝検出状況（南から）